

可觀小説卷六

一、岐祖久々利衆喧嘩の始末

岐祖山家、福島久々利等にむかしよりの地主拾餘人有之候て、尾張侯の與力に附置かれ候。其内山村甚兵衛・千村平右衛門兩人は領知も高く、三千石外九人は八百石より五百石許の知行也。所謂九人者千村次郎右衛門・山村清兵衛・山村善右衛門・原十郎右衛門等也。寛文の頃耶蘇宗門御沙汰嚴密にて、一家々々より帳面を仕立、名隠屋へ出し候事あり。其より先右の衆中、名隠屋へ一年に一度、年禮を申上候迄にて、出仕と申儀も無之候。若し書附帳面も出し候事候へば、甚兵衛・平右衛門兩家は高知にて、切々飛脚も出し候故、それへ傳附して九人の者より別に出す事無之候。耶蘇宗門の事にて、數ヶ度彼此と有之、飛脚の往來有之候に付、幸の儀に候間甚兵衛・平右衛門兩人より取立候て、名隠屋へ可差上と有之に付、自然と頭支配の様に罷成候。就其九人寄合、か様に罷成候ては兩人の組下に罷成候と申もの也。か様に有之まじき儀に存候趣、御家老中へ迄書附を以

相斷、別に頭被仰付候様にとの願の筋に候。尾侯御間被成一段の儀に候間、於名隠屋頭可被仰付候。代り〳〵尾張へ罷出候はゞ、夫々役儀も可被仰付と有之候。其通に仕見候處、結句初よりは様子あしく罷成、直の尾張衆同前に相見勤仕も出来、心外の儀共有之候。此節尾公御仕置少々改り、御普代者を始め死後には跡目知行半分宛減少被仰付候。其故九人寄合、近頃口惜き様子に罷成候。此方共の内も、萬一死後に領知減少被成候はゞ一訴訟申、如元に願かへし可申候。若不相調候はゞ九人共奮領を立退申か、萬一彌存外の様子も候て、一人にても罪科などに被仰付候はゞ、九人共に切腹可仕とかたく申候。然處九人の内壹人死去仕候。跡職の儀如何可有之哉と申候處、減少被仰付候に付、其せがれ立退申候。其折節於名隠屋山村清兵衛儀、足輕頭に被仰付、江戸へ御供可仕旨也。其儀を千村次郎右衛門借宅へ參申聞候。次郎右衛門・清兵衛は從父兄弟也。次郎右衛門申候は、九人の者此度申談候儀は、生死を一致に極め候て約諾仕置候處、其方物頭に被仰付候儀、一往内談にも不及請合候儀、曾以て聞え不申候。六人の者定て手前同事

に可存候と申候處、清兵衛不同心の返事に付抜合、次郎右衛門も傷つき候へども、清兵衛をば當座に切殺し申候。式臺へ出で戸に鎖をおろし、せがれ並家來招之、段々の首尾を申聞切腹仕候間、介錯可仕と申候。家來達て留申候は、岐祖の内不限、何方へ御退被成候ても自由に罷成候。只御退可然とすゝめ候處、次郎右衛門申候は、いとこを切殺し候て、何方へ退可申候哉。只とく介錯仕候様にとて、其儘切腹仕候。清兵衛供の者共様々申候得共、難なく借宅へかへし申候。清兵衛子有之候處、尾州より被召出候。次郎右衛門子も其後被召出、今又次郎右衛門と申候。皆奮領は被差除、百五十石御知行被下候。

右次郎右衛門並九人の内、山村善右衛門は岡田豊前守殿婿也。則岡田喜六郎爲には姉婿也。寛文七八年夏の頃の儀にて、其初喜六郎は熱田邊名隠屋などに住居、即日次郎右衛門宅へかけ付候得共、事落着の後に候。年二十歳許の旨被申聞候。

此時喜六郎、和氣殿の師匠梶原源左衛門と申者、幸に有合候て同道仕かけ付申候旨。此源左衛門名譽の事共覺申

候。其内用に立申事は、槍を馬上にて腰にかため參様有之候。道具等も入不申候。脇よりは二人かゝりても難取難儀。自身取候へば其儘取申候。秘事に仕候へども藤太夫にも致被申候。

一、一色内藏助の刃傷事件

寛文二年壬寅の歲、御勘定頭伊丹播磨守宅へ内寄合に付、岡田豊前守未明より參り、兩人にて書附共見届居被申候。明六つ時分にて候。原吉原の御代官一色内藏助、次の間より刀を抜ながら提げ參り、播磨守後よりけさがけに切付申候。豊前守見付切懸可申と被仕候處へ、是へも切懸候。豊前も三ヶ所手を負候得共、内藏助をば終に打留申候。其跡へ播州子息並家來共寄合、散々に切臥申候。間もなく御老中久世大和守殿見舞被申候。播州息絶不申内にて和州へ被申候。私事常々驕も有之、か様の儀に罷成候哉と可被思召哉と迷惑仕候。全く其覺え無御座候。内藏助をば豊前守打留候て大慶に存候旨挨拶有之、無程被相果候。内藏助代官所にて引負有之候に付、其儀を播州異見被仕候由。其日御用に付召寄被申候に付、何とぞ被仰付候哉との疑有之候